



週報

WEEKLY REPORT 2024-2025



事務所 三重県伊賀市西明寺2756-104 ヒルホテルピア伊賀内
TEL 0595-24-4650 FAX 0595-24-4656

例会 毎週木曜日 12:30点鐘 第3・第5週例会 18:00点鐘
ヒルホテルサンピア伊賀 TEL 0595-24-7000

2062No.33

URL: <http://www.ict.ne.jp/~u-eastrc/> e-mail: u-eastrc@ict.ne.jp

本日の例会 創立記念例会
第2063回 2025年4月17日(木)

開会点鐘 18:00
国歌『君が代』・ロータリーソング『奉仕の理想』
ゲストのご紹介
皆出席表彰
誕生月のお祝い
出席報告
会長の時間
幹事報告
ニコニコボックスの報告
委員会・同好会報告
本日の行事 創立記念例会
閉会点鐘 20:00

前回の例会 移動例会 観桜例会
第2062回 2025年4月10日(木)

開会点鐘 12:30
ロータリーソング『我らの生業』
食事の時間
出席報告
会長の時間
幹事報告
ニコニコボックスの報告
委員会報告・同好会報告
本日の行事 観桜例会
閉会点鐘 13:30

出席報告
岡田出席委員長
正会員37名 欠5名
(内免除者4名)
出席率 96.97%

会長の時間 小林会長

皆さん、こんにちは
本日は山溪寺さんのご厚意で、毎年ほぼ恒例となりました、鑑桜例会です。
後ほど長谷川会員の卓話もあります。
どんな卓話を聞かせていただけるか楽しみにしております。
山溪寺のきれいな桜と長谷川会員の卓話、思いっきり楽しんでください。以上です。ありがとうございました。



幹事報告 山森幹事

来週の4月17日(木)創立記念例会
について報告
4月12日(土)地区研修・協議会
について報告



神崎会員ご卒業
益々のご活躍を

今までありがとうございました(涙)



ニコニコボックスの報告 瀧山委員長 『神崎さん、お元気で』

小林会長・・・本日は長谷川会員ありがとうございます。
小林会長・・・中井さん先日はありがとうございました。
山森幹事・・・数珠忘れました。すいません。長谷川さん宜しくお願いします。
神崎会員・・・今日が最後の例会出席にばります。ありがとうございました。
中井会員・・・長谷川様お世話になります。
栗本会員・・・長谷川さんお世話になります。
伊藤会員・・・山溪寺さん桜きれいですね。土曜日家内がお世話になります。
前田会員、瀧山会員・・・中井さん昨日は大変お世話になりました。
鈴木会員、中西会員、平井会員、神戸会員・・・長谷川さんお世話になります。
中里会員、三山会員、三谷会員、南会員、宮田会員、子日会員・・・山溪寺さん今日はお世話になります。
中尾会員、木津会員、恒岡会員、岡田会員、中村会員、宮岡会員、樋口会員・・・長谷川会員ありがとう。



山溪寺観桜例会卓話『敬斐和尚悲話』 ` ` 令和7年4月10日

『眼（まなこ）閉じ今わの際に握りしは実る稲穂か？無患子（むくろじ）の実か？』

この寺（山溪寺）は今から410年前に藤堂高虎公によって創建された。410年前というと古く思われるが歴史の街伊賀上野では山溪寺はどちらかと言えば新参者である。高虎公がこの地に転藩されてから建立したので他の主だった寺よりも100~200年新しい。この地域の多くの寺は“天正伊賀の乱”で織田信長軍により甚大な被害を被ったが山溪寺は“本能寺の変”の33年後に建立されているので自ずと被害は免れたのである。

とはいえ410年の歴史があり拙僧が22世の住職となる。従ってこれまで21人の祖師（先輩住職）が寺を護ってきたのである。その中のお一人が本日の卓話の主人公である。少しばかりもの悲しい話にはなるが職業奉仕的な要素も含んでいるのでどうぞお付き合い願いたい。

主人公の名は敬斐禅師（けいそうぜんじ1750-1792）という。江戸中期の山溪第10世の住職である。物語の結末を先に言ってしまう。敬斐和尚は今から233年前の1792年（寛政4年）藤堂藩の手によって斬首刑に処せられ43歳の若さで生涯を閉じたのである。ショッキングな話だがつまりこういうことになる。高虎公がその一族の菩提を弔う目的で建立した寺の10代目の住職を藩が自らの手で処刑したのである。一体何があったのだろうか。その前に、敬斐和尚の略歴を駆け足で振り返ってみよう。寛延3年(1750)現在の伊賀市青山の北山という在所の農家に生まれ市兵衛と名乗った。（農家に生まれ育ったことを頭に留め置いていただきたい）才覚を見込まれた市兵衛は村長である山内家に奉公し素養を身に着け山溪寺第8世の天嶺和尚に弟子入りし更に禅の奥義を極めるべく山溪寺の本山である京都東山の（会員の皆さんも幾度となく見学された）東福寺あるいは花園の妙心寺で修行を積んだ。33才で伊賀に戻った市兵衛は山溪第10世として敬斐玄肅（けいそうげんしゅく）と名乗った。数年後、敬斐和尚には悲しい運命（さだめ）が待ち受けることとなる。寛政年間（約240年程前）伊賀では飢饉が続き農民は飢えと年貢に苦しんでいた。見かねた下友生村の粕屋忠次郎は藩主への年貢軽減の嘆願書の執筆を敬斐和尚に依頼した。二人は藩に税の軽減を直訴したが受け入れられることはなかった。地域の困窮を憂いた敬斐和尚と粕屋忠次郎はあきらめることなく命をかけて“禁じ手”を使った。藩を飛び越えて江戸幕府への越訴（おつそ）に踏み切ろうとしたのである。そんなことをされたら藩はたまったもんじゃない。幕府から改易（お家取りつぶし）されるかも知れない。藩の立場から見ればもはやこの二人は民を助ける慈愛に満ちた和尚さんと庄屋さんではない。藩に刃向かう謀反人となるのである。

寛政4年(1792)12月21日久米河原の刑場にて敬斐和尚は粕屋忠次郎は連座して斬首に処せられた。“民草の露の命は消ゆるともめぐむ心はよろず世の末”という無常観漂う辞世を遺して・・・敬斐和尚の師匠筋の僧や民衆たちの藩主高疑（たかさと）公への除命嘆願が認められたのは刑執行の直前だったという。赦免の上意を伝える津の本城からの早馬特使が長野峠を越えて伊賀に向ったが時すでに遅し・・・敬斐和尚は露の命と消えたのである。この赦免の話はよりいっそうもの悲しさを深めてしまう。（何でもっと早く馬を走らせへんかったんや！）

江戸中期、敬畏和尚に降りかかった越訴事件の顛末を駆け足で振り返ってみた。私は敬斐和尚に思いを馳せる時ふと考えることがある。冒頭の一首は12代後世の拙僧（私）が処刑直前の敬斐和尚の心境を推測して詠んだ拙歌である。敬斐和尚は往生の間際、何者であったのだろうか？和尚さんか？百姓さんか？むくろじの実（数珠）か、あるいは稲穂を握りしめていたのか？それは敬斐和尚にしかわからない。考えても詮無いことはわかっている。しかしながら、和尚であれ百姓であれ、結末は悲しいものであれ、民を慈しみ民の為に身をもって“**職業奉仕**”を実践したことは間違いない。



